

平成 11 年度～12 年度

特別研究開発プロジェクト

「グローバル人材育成のための本学附属大泉小学校、国際中等教育学校の連携・教育課程のあり方に関する研究」

プロジェクトリーダー：出口利定（教育心理学講座）

嶽 里永子、福泉悦也、赤羽寿夫、星野あゆみ（附属国際中等教育学校）

キーワード：バカロレア校、グローバル人材、美術教育、教科間連携

はじめに

附属国際中等教育学校は国際バカロレア機構（IBO）が認定するバカロレア校であり、現在、ミドルイヤープログラム（MYP）を実施している。このプログラムの特色の一つは、教科間の連携が密になされることである。本プロジェクトにおいて、様々な教科間連携の実態を調査したが、特に美術科における連携の在り方、美術教育におけるグローバル教育とはどのようなものかについて、外国の IB 校を視察し美術科教育における連携の在り方について視察したので報告する。

訪問先は IB 認定校（IB World School）である Woodcroft College、Mercedes College、St. Brigid's College の 3 校を訪問した。各校の MYP 芸術課程（Arts）の教員である Renée McCarthy 教諭、Ashley Coats 教諭、Mark Sills 教諭の協力のもと、それぞれの学校で美術の授業を中心に学校の様子を視察した。

1 Woodcroft College の視察

筆者（嶽）は南オーストラリアの州都アデレード（Adelaide）にある Woodcroft College（図 1）を訪問した。Woodcroft College にはジュニアスクール（小学校 1～5 年生相当）、ミドルスクール（小学校 6 年生～高等学校 1 年生相当）、シニアスクール（高校 2～3 年生相当）がある。留学生も在籍している。ジュニアスクールとミドルスクールの生徒は全員が IB の PYP と MYP のカリキュラムを受けている。シニアスクールのカリキュラムについては南オーストラリアのカリキュラム（SACE）か DP どちらかを生徒が選択しているが、多くの生徒は SACE を選択しているとのことであった。授業期間は全学年共通で 1 年間を 4 学期に分けており、1 学期は 10 週間である。

芸術課程音楽科主任の Renée McCarthy 教諭が主として案内を行った。図書室（図 2）、調理室、木工室（図 3）、音楽室（図 4）、グラウンド（図 5）、体育館等の施設を視察した。これらの施設は生徒が活動するのに十分な広さや機材が確保されている印象である。特に、木工室は相当の広さで、かなり大きな木材や機械を置く余裕があり、高学年の生徒が制作したタンスや机等、大きな家具の作品も保管されていた。（図 6）

次に、MYP とシニアスクールの芸術課程デザイン科担当の Laura Roadknight 教諭とともに、PYP と MYP と DP の美術の授業の様子を見学した。MYP year 1（小学校 6 年生相当）の美術の授業では、自分のイニシャルをデザインする授業を通じて、色彩のグラデーションやレタリングや装飾模様について学習させていた。（図 7）

DP のクラスでは、生徒が各自で研究主題をたてて制作を進めていた。2012 年度現在で Woodcroft College で DP の美術を選択している生徒は 3 名で内 2 名は台湾からの留学生とのことであった。生徒の IWB（Investigation Workbook）には美術の基礎的知識のまとめ、探求テーマの設定、習作のプロセスが記録されている（図 8）。ある台湾人の生徒は、日本の浮世絵や能面の美しさにインスピ

レーションを得て（図9）、フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」に着物の柄や白塗りの顔を融合させた作品を制作し、美の追究を試みていた（図10）。

PYP の Arts の授業は MYP や DP とは別の建物の教室で行われていた。教室には、エリザベス女王を描いた絵や、グループ制作の大きな絵、様々な素材のコラージュ、粘土を焼いて作った顔など、様々な作品が飾られていた。児童はスケッチブックを持っているが、MYP や DP のワークブックに比べると文字による記録は少なく、ほとんどが試し描きや習作の跡であった（図11）。PYP では知識の習得よりも実技の体験性を重視しているとの事であった。授業観察の時間外に、多目的ホールのある建物入り口につくられたギャラリースペースを訪れた。ここで、芸術課程主任の Marty Fox 教諭と、Laura 教諭、Renée 教諭とともに、Woodcroft College の様々な学年生徒の絵画作品を展示した（図12）。これらはアートチャリティーオークションとして出品された作品であり、収益を慈善団体に寄付するとのことである。生徒は作品発表の機会を得るとともに、アートによる社会貢献を通じて、MYP の CS や DP の CAS に対する意識を高めることにもつながると思われる



図1 Woodcroft College



図2 図書室



図3 木工室



図4 音楽室の楽器場所



図5 芝生のグラウンド



図6 木工作品や材料の保管場所



図7 MYPyear1 生徒の作品より



図8 DP 生徒の IWB より



図9 DP 生徒の IWB より



図 10 DP 生徒の作品より



図 11 PYP 生徒のスケッチブック



図 12 チャリティーの為の作品

2 Mercedes College の視察

南オーストラリアの州都アデレード (Adelaide) にある Mercedes College を訪問した (図 13)。Mercedes College の学年の枠組みや授業期間については、先の Woodcroft College と同様である。

芸術課程映像科担当の Ashley Coats 教諭が主として案内を行った。まず最初に美術室を訪れた。美術室には自国や他国の文化に関連する様々な装飾品や作品が飾られていた (図 14)。午前中は DP との MYP の美術の授業をそれぞれ見学した。

DP year 2 (高等学校 3 年生相当) の美術の授業は、先の Woodcroft College と同様、講義形式をとっ

ておらず、数名の生徒が自主学习していた (図 15)。この学校の DP の Visual Arts は 1 コマおよそ 40 分間の授業が週 5 コマあるとのことである。制作活動と並行して IWB 記録を 1 週間に 4 ページは進めるよう指導がなされている (図 16)。Mercedes College の授業期間も Woodcroft College と同様に 4 学期制で、1 学期は 10 週間である。生徒は 1 学期につき IWB を約 40 ページ、大きな作品を 2 つは制作することになる。

MYP year 4 (中学校 3 年生相当) の美術の授業では、和紙のような薄紙を使ったランタンを制作させていた。生徒は、蓮の花、松ぼっくり、巻き貝、洋梨などといった自然物から造形の美しさを感じとり (図 17)、それらの形を自分なりにデフォルメして構造をつくっている (図 18)。また、イサム・ノグチなどの作家も調べて DW (Developmental Workbook) にまとめ、発想のヒントを得ている。学習の評価については、教師が学習活動における各評価規準の内容を説明する資料等を提供し、生徒に明確に示している (図 19)。この学年の美術の授業時間数は週 4 コマで、この単元は約 7 週間を使って学習するとのことであった。

Ashley 教諭による MYP year 4 の Language A (英語) の授業を見学した (図 20)。英文のストーリーをもとに映像作品を制作するという課題で、台本は一人一人が作成し、撮影はグループで協力して行う。そこで、各生徒は各撮影カメラの役割分担や撮影指示の記述を含めた英語の台本を作成しなければならない。授業の形式で印象的だったのは、生徒全員がタブレット型コンピュータを使っており、そこで授業のシラバスや教材が共有されていたことである (図 21)。見学時は台本の構想を紹介し合って意見交換する段階であったが、台本のテンプレートが画面に表示されていた。この後の授業で映像を撮ったり編集したりする際は内蔵ソフトを使用するそうである。この授業だけでなく MYP 生徒達は全員自分のタブレット型コンピュータを携帯している。さらに DP およびシニアの生徒達は全員自分のノートパソコンを携帯しているとのことであった。学校現場においてこのような最新機器の活用は日本以上に浸透していると感じられる。しかし一方で、生徒の多くはアイデアスケッチの際に紙のノートも併用し考えを細かく書き込んでいた。電子機器と紙媒体の両方を

使用する理由を生徒の一人に尋ねると、「どちらのツールも良さがあり必要だから」という明確な返答があり、やみくもに電子機器に頼るのではなく主体性を持ってツールを使い分けている姿勢が見られた。



図 13 Mercedes College



図 14 美術室-アフリカの仮面



図 15 DP 美術の授業風景



図 16 厚みが感じられる IWD



図 17 MYPyear4 美術の授業風景



図 18 MYPyear4 制作中の作品

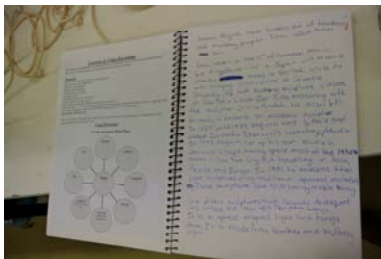


図 19 DW に貼られた評価規準資料



図 20 MYPyear4 英語の授業風景

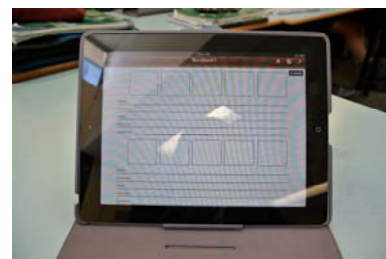


図 21 画面に表示された教材

3 St. Brigid' s College の視察

西オーストラリアの州都パース (Perth) にある St. Brigid' s College を訪問した (図 22)。St. Brigid' s College には、幼児向けの幼稚園やプレプライマリーのほか、ジュニアスクール (小学校 1～6 年相当)、ミドルスクール (中学校 1～3 年相当)、シニアスクール (高等学校 1～3 年相当) がある。留学生も在籍している。もともと女子生徒のみの学校であったが、現在ジュニアスクール以下は共学である。

芸術課程演劇科担当の Mark Sills 教諭が主として案内を行った。まず Mark 教諭が担当するシニアスクール 2 年生 (高等学校 2 年生相当) の演劇の授業 (図 23) を見学し、体育館 (図 24)、プール (図 25)、ホームルーム教室 (図 26)、寮 (図 27)、庭 (図 28) など、校内の様々な施設を視察した。敷地内の庭をはじめ屋外には植物が豊富にあり、理科で実験用の植物採集等も行なっているようである。各施設の視察後、午前中は MYP の美術の授業をいくつか見学した。

美術科担当の Amanda Savino 教諭による MYP year 5 (高等学校 1 年生相当) の美術の授業では、「Shells of the Sea」という単元で、生徒達は貝殻の形からインスピレーションを得た陶器の作品

を完成させていた。(図29) Amanda 教諭は、生徒にはこの単元を通じて、自然物のもつ色、形、質感、線、対比などの美しさから発想を得ることを学んでほしいと話していた。ユニットクエスションは「How can nature inspire me to create?」である。授業見学時、生徒は活動の振り返りと評価をDWにまとめているところであった。作品を画像で記録し自分のノートパソコンに取りこんでレポートを作成している生徒が多かったのが印象的である(図30)。

美術科講師のNicola Lee先生とJo Markovic先生によるMYP year4(中学校3年生相当)の美術の授業では、「Surrealism - Alone in a Crowd」という単元で、生徒達は独自の空想キャラクターをデザインし(図31)、粘土で立体的な像を制作していた。ユニットクエスションは「Why does surrealism affect people in the ways that it does?」である(図32)。

昼食後、MYP year3(中学校2年生相当)のLanguage B日本語の授業を見学した。St. Brigid's CollegeのLanguage Bはイタリア語と日本語を開講しており、生徒の約3分の1が日本語を選択している。担当はSarah Fuller教諭で、授業中の生徒への指示も日本語を使用している。日本語授業用の教室が特別に設けられており、いたるところに日本語や日本文化に関するものが掲示されていた(図33)。



図22 St. Brigid's College



図23 演劇の授業風景



図24 体育館で活動する園児



図25 屋内の温水プール



図26 HR教室の様子



図27 寮

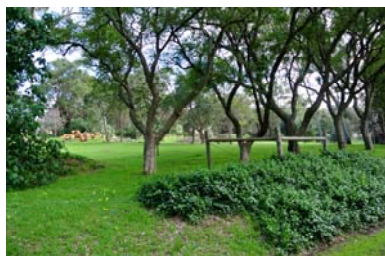


図28 敷地内の美しい庭



図29 MYPyear5 生徒作品より



図30 MYPyear5 美術レポート作成



図 31 MYPyear4 生徒の DW より



図 32 MYPyear4 生徒作品より



図 33 日本語の授業教室

おわりに

3つのIB校すべてにおいて、校内に学校作成のAOIポスター等が掲示されていること、授業の評価規準があらかじめ生徒に示されること、奉仕活動に積極的であること等、日本のIB校と同じような学習環境づくりが随所に見られた。美術の授業についても、ワークブックの活用の仕方など共通する部分が多かった。作品については陶芸のオブジェや紙のランプシェードなど日本の学校でも扱われるような題材が見られ、指導者の題材感にも共感するところが多かった。

一方、美術の授業の形式については、教師が講義をする場面はほとんどなく、大半が生徒の自主性にゆだねられているのだが、一人一人が自立して学習を進めている様子が印象的であった。多文化理解の視点からは、校内にアボリジナルアート作品が飾られている学校や、アフリカの仮面、日本の木版画、中国の装飾品などが展示されている学校もあり、自国および世界各地の多様な文化や表現に対する関心の高さがうかがえた。学習スタイルについては、生徒全員が筆箱やノートと一緒にノートパソコンまたはタブレット型コンピュータを持参し、紙媒体の教材とうまく使い分けながら授業にのぞむ姿が定着していることは興味深く、一つの可能性を感じさせた。また、学校の景観について、3校ともやや郊外に位置する事もあり日本の都市部の学校に比べると敷地はかなり広く感じられた。教科ごとの授業教室の数、教職員が情報交換できる休憩スペース、生徒の憩いの場となるスペース等が十分に確保されているといった、施設面の充実が見られたほか、ラグビーのできる芝生グラウンドや美しい植物庭園等、冬季にも関わらず緑の多い環境が印象に残った。